

令和 6 年度 地域イノベーション連携  
石狩モデル事業委託業務  
報告書【概要版】

令和 7 年 2 月

株式会社毎日みらい創造ラボ

---

## 目次

---

|   |                       |    |
|---|-----------------------|----|
| 1 | 業務の目的 .....           | 4  |
| 2 | 地域課題の抽出と整理 .....      | 5  |
|   | （石狩市内事業者への課題抽出ヒアリング等） |    |
| 3 | 募集及び選考 .....          | 7  |
|   | 1） 募集                 |    |
|   | ・ 募集方法                |    |
|   | ・ 募集結果                |    |
|   | 2） 選考                 |    |
|   | ・ 選考方法                |    |
|   | ・ リサーチ合宿及びピッチ選考会      |    |
|   | ・ 選考方法                |    |
|   | ・ 選考結果                |    |
| 4 | 実証実験 .....            | 12 |
|   | 【株式会社 JOYCLE】         |    |
|   | ・ 解決しようとした課題          |    |
|   | ・ 課題の解決方法             |    |
|   | ・ 実証実験の内容             |    |
|   | ・ 実証実験の結果             |    |
|   | ・ 実証実験を通じた今後の展開       |    |
|   | 【エレックス工業株式会社】         |    |
|   | ・ 解決しようとした課題          |    |
|   | ・ 課題の解決方法             |    |
|   | ・ 実証実験の内容             |    |
|   | ・ 実証実験の結果             |    |
|   | ・ 実証実験を通じた今後の展開       |    |

【幸海ヒーローズ】

- ・ 解決しようとした課題
- ・ 課題の解決方法
- ・ 実証実験の内容
- ・ 実証実験の結果
- ・ 実証実験を通じた今後の展開

|   |                         |    |
|---|-------------------------|----|
| 5 | 成果報告会の運営業務 .....        | 15 |
|   | ・ 成果報告会の実績              |    |
| 6 | 地域総合整備財団への報告 .....      | 16 |
|   | ・ 地域イノベーション連携研究会への参加    |    |
|   | ・ 地域イノベーション連携研究会への報告書作成 |    |
| 7 | 課題の整理 .....             | 17 |
|   | ・ 課題の解像度をどう高めるか         |    |
|   | ・ 地域のセンスメイキングについての課題    |    |
|   | ・ 参加者募集に関する課題           |    |
|   | ・ 実証実験の課題               |    |
|   | ・ 事業推進についての課題           |    |

# 1 業務の目的

石狩市は、札幌市の北側に隣接し日本海に面する自治体である。東西に約 29 km、南北に約 67 km、総面積は約 720 km<sup>2</sup>であり、人口は令和 7 年 1 月末現在 57,063 人となっている。石狩市は、漁業や農業といった一次産業を中心としてまちが発展し、昭和 40 年代以降は、札幌圏の港湾として「石狩湾新港」の開発が進み、二次産業、三次産業も集積している。石狩湾新港地域は、物流、製造業に加え、近年はデータセンターや大型商業施設も立地するなど都市型の産業空間として今後も更なる成長が見込まれているほか、良好な風況から風力発電所等の再生可能エネルギー（以下「再エネ」と言う）も大規模に集積が進み、再エネ発電施設と産業が同一エリアに混在する国内でもまれな地域となっている。一方、札幌市中心部から約 15km、車で約 30 分という立地条件にも関わらず、高齢化による労働人口の減少などを背景に、農業、漁業、林業などの一次産業を中心にいくつもの課題を抱えている。

スタートアップにとって社会課題は「ビジネスの種」ともいえ、評価額が 10 億円を超す「ユニコーン企業」の多くも、課題に対する解決策をビジネスの形で提示し、大きく事業成長してきた。東京などの都市部でも社会課題はあるものの、課題を解消するために事業化を進めるライバルの起業家の数が多いという難点がある。

一方、都市部に集積するスタートアップが、人口減少に悩む国内の地方における地域課題の現場へ実際に足を運ぶ機会は少ない。石狩市は大都市・札幌に隣接し、北海道の空の玄関口である千歳市にも近い好立地でスタートアップを呼び込みやすく、彼らが技術やビジネスモデルで解決したい課題は豊富にある稀有な地域ともいえる。

本業務は、全国のスタートアップとのつながりを構築し、地域課題とスタートアップのマッチングにより地域課題の解決と新たな産業の創出を推進するほか、石狩市をフィールドとしたスタートアップの実証実験や事業化を通じて石狩湾新港地域内に集積が進むデータセンターのデータ需要創出を目指すことを目的とする。

## 2 地域課題の抽出と整理

石狩市でスタートアップの支援を実施するのは今年度が初めての試みであり、本事業に参画するスタートアップが集まるかという懸念があった。このため、スタートアップの募集にあたっては、石狩市の地域課題をイメージしやすく、かつ北海道の他地域への横展開が可能となる「一次産業」の課題を重点テーマとして取り上げることとした。

令和7年7月3日～5日の3日間、当社メンバー4人が石狩市と同行し、石狩市内の農家（新規就農者、畜産農家、果樹園）、水産事業者（人手不足や販路拡大）、飲食店（跡継ぎ問題）、温泉施設（施設の利活用）などを視察し地域課題のヒアリングを実施した。なお、視察時の当社メンバー4人のうち3人が15年～30年以上の新聞記者としての経験を有しており、新聞記者としての経験を活かした「取材」という視点でヒアリングを行い、顕在化した地域課題を掘り下げることを意識した。



※視察で石狩市内の畜産事業者でヒアリングを実施したときの様子

視察時は地域課題の現場だけではなく、石狩湾新港地域周辺の風力発電施設やデータセンター、大勢の人が訪れる道の駅、住宅地で行われている無人自動配送ロボットを活用したデリバリーサービスの実証実験の現場も訪れ、石狩市の経済面でのポテンシャルを感じ取ることができた。



※令和6年7月3日～7月5日 視察先一覧

視察終了後には石狩市と協議を重ね課題の整理を行い、後述する「3.参加者の募集及び選考」を遂行するための基礎資料とした。

**漁業分野**

- 工程における手作業の労力が大きい。大量に獲れるニシンを網から外す作業や雄と雌を仕分けする作業をニシンの腹部を軽く押して判別している。
- 上記作業を含む陸地作業を行う働き手の人手不足が深刻
- 他の産業と比較して、海中は見ることができないため長年の経験の継承などが課題
- 定置網漁業の秋鮭漁では、現地に行って網お越しのタイミングを確認するため業務の効率化を図りたい。

**農業分野**

- エゾシカ等による農作物への被害が深刻
- 米、ミニトマト、ブロッコリーなど地域の特産品の知名度向上、ブランド化
- 農業従事者の中には、色弱によりミニトマトの収穫時期がわかり難いといった課題

**林業分野**

- 末口直径の計測や測量、木々の下草刈りなど手間のかかる業務の効率化が課題
- 野鼠やエゾシカによる苗木被害
- 植林業務を行う人材の不足



※石狩市の抱える課題まとめシート

### 3 募集及び選考

#### 1)募集

石狩市でスタートアップの支援を実施するのは今年度が初めての試みであったことから、本事業の周知は重要なものと考えた。石狩市のホームページで周知を行ったほか、スタートアップの外部専門家である毎日みらい創造ラボのウェブサイト内にランディングページを開設するとともに Facebook など SNS 広告を活用して周知の拡散を図った。また、外部専門家と関係のあるスタートアップに対してはメールの配信を行うなど、本事業の周知を徹底した。

**【募集方法】**

- ① 毎日みらい創造ラボのウェブサイト内において、参加者募集のためのランディングペー

ジを6月14日に開設した。ランディングページはFacebookなどSNS広告を活用して拡散を図るとともに、毎日みらい創造ラボと関係のあるスタートアップや投資家など650人にメールを配信した。また、本事業に対して参加する可能性が高そうなスタートアップには、毎日みらい創造ラボから直接参加を呼びかけたほか、石狩市からはSTARTUP HOKKAIDOを介しての周知も行った。



※毎日みらい創造ラボのランディングページやFACEBOOKページ

- ② 令和6年7月10日と7月24日、オンラインで事業説明会を実施した。地域課題の抽出で整理した一次産業の課題や地域の魅力について、石狩市から事業説明会の参加者へプレゼンし質疑応答が行われた。計2回の事前説明会には延べ50人が参加している。

### 【募集結果】

事業説明会を踏まえ応募があったスタートアップは10社であった。

## 2)選考

### 【選考方法】

本事業への応募にあたっては、メールにより参加の意思を表明するとともにエントリーシートの提出を求めた。エントリーシートには、資本金や従業員数、導入事例、実証実験の可能性について記載してもらい事前の確認を行った。

エントリーシートの内容を参考にし、石狩市と本事業への参加企業について協議を行った結果「石狩＝実証フィールド」との認知をスタートアップ界隈に広げるため、今年度は応募のあった10社すべてをリサーチ合宿の参加者として採択した。

令和6年度地域イノベーション連携モデル事業  
「実証フィールド石狩」エントリーシート

## 1 《概要》

|        |                                                                                                                                                                                                                                           |        |      |
|--------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------|------|
| 会社名、屋号 |                                                                                                                                                                                                                                           |        |      |
| 代表者名   | 担当者所属<br>氏 名                                                                                                                                                                                                                              |        |      |
| 所在地    | 〒                                                                                                                                                                                                                                         | TEL:   | FAX: |
| ホームページ | http://                                                                                                                                                                                                                                   | E-mail |      |
| 事業区分   | ※下記の中で事業内容に該当するものに1つ○をしてください。<br>(1)農林水産業 (2)住宅・建築 (3)医療・福祉<br>(4)生活文化・生活支援・アミューズメント (5)環境・リサイクル・産業廃棄物処<br>理<br>(6)新エネルギー・省エネルギー (7)情報・通信（インターネット関連を含む。）<br>(8)バイオテクノロジー<br>(9)先端製造技術（省力化を含む。） (10)流通・物流 (11)人材・教育<br>(12)ビジネス支援 (13) その他 |        |      |
| 設立年月日  | 資本金                                                                                                                                                                                                                                       | 従業員数   | 名    |
| 沿革     | 代表者のプロフィール                                                                                                                                                                                                                                |        |      |

## 2 《理念・ミッション》

|  |
|--|
|  |
|--|

## 3 《事業・サービスの内容》

|  |
|--|
|  |
|--|

## 4 《導入事例（自社サービス等の実証実験、協業等）》

| 導入先 | 事業名 | 内 容 |
|-----|-----|-----|
|     |     |     |
|     |     |     |
|     |     |     |

## 5 石狩市で実施したい実証実験の具体的計画（必要なヒアリング先や協業先候補等）

|  |
|--|
|  |
|--|

## ※エントリーシート（計3ページ）

## &lt;内容&gt;

1. 企業概要
2. 理念・ミッション
3. 事業・サービスの内容
4. 導入事例  
（自社サービス等の実証実験、協業等）
5. 石狩市で実施したい実証実験の具体的計画  
（必要なヒアリング先や協業先候補等）

### 【リサーチ合宿及びピッチ選考会】

- ① リサーチ合宿に参加するスタートアップとは、合宿参加の1か月前に個別のオンライン面談を実施した。オンライン面談では、石狩市及び毎日みらい創造ラボが参加し、スタートアップの保有技術やビジネスモデルを確認しながら、スタートアップの希望するリサーチ先のヒアリングを行った。オンライン面談後には、どのようなリサーチ先が適切か石狩市と毎日みらい創造ラボにて検討した。
- ② 個別のリサーチ先は石狩市にて候補を選定し、リサーチ合宿前にスタートアップ側に通知を行った。リサーチ先へのアポイントメントは、スタートアップ自ら行う場合と石狩市でアポイントを調整する2つのパターンとし、スタートアップから直接リサーチ先へアポイントを取る際にも、石狩市であらかじめスタートアップから依頼があることをリサーチ先へ事前に周知し、円滑に調整ができるよう努めた。初めて石狩市内でのリサーチを行うスタートアップ側と石狩市内のリサーチ先との間に、行政が介入し丁寧なスケジュール調整を行うことで、各事業者のスタートアップへの信頼性が担保されたものと思慮される。
- ③ 令和6年9月26日から9月28日にかけてリサーチ合宿を実施した。26日に石狩市役所内でオリエンテーションが行われた後、各スタートアップが石狩市内のリサーチ先へ出向き、ヒアリングを実施した。各スタートアップのリサーチ先は概ね3社であった。



※事業者ヒアリングするスタートアップ

- ④ スタートアップによるリサーチにおいては、スタートアップとリサーチ先となる各事業者の意見交換が活発なものとなるよう石狩市及び毎日みらい創造ラボ、さらには総務省・

地域活性化伝道師の伊東将志氏が可能な限り同席することとした。また、リサーチ後は、スタートアップと石狩市及び毎日みらい創造ラボにおいてリサーチ結果を共有し、各事業者が有する地域課題の解像度を高める作業を行った。

### 【選考方法】

合宿最終日となる令和6年9月28日、スタートアップ各社が石狩市役所に集合し、石狩市内で行う実証実験について企画したプレゼンテーションを行った。審査員は石狩市企画政策部長、企業連携推進課長、新産業創出担当課長、総務省・地域活性化伝道師の伊東将志氏が務めた。プレゼンテーションは、1社7分、質疑応答5分で行われた。



※プレゼンテーションするスタートアップ

審査員一人につき、持ち点は100点とし、4人の審査員により合計400点満点で審査を行った。なお、審査項目は以下の通りとした。

### 審査項目

#### ① 市への貢献度(1)課題解決…15点

石狩市の抱える課題解決に資するか

#### ② 市への貢献度(2)新規価値の提供…15点

本市にビジネスモデル発想や技術などにおいて新たな価値を提供できるか

#### ③ 市内企業・団体等との連携可能性(1) 資産活用…15点

本市の持つ人的・物的資産を十分に活用できる内容か

#### ④ 市内企業・団体等との連携可能性(2) 継続性…15点

実証実験の実施後も本市や市内企業・団体との継続的な関係性構築が見込めるか

- ⑤ 今年度中の実証実験の実現可能性と遂行能力…15 点  
2024 年 10 月～25 年 2 月の期間中に実証実験を実行できるか、また、その遂行能力が認められるか
- ⑥ 実証実験や仮説検証の実施による成長可能性…15 点  
実証実験が有意義な効果をもたらし、提案者の事業伸展に将来性を見込めるか
- ⑦ 審査員加算点…10 点  
上記の基準以外で、審査員独自の視点で加算すべきポイントがあるか。

### 【選定結果】

審査員 4 人による審査の結果、以下 3 社を実証実験実施企業として選定した。

▽株式会社 JOYCLE（名古屋市中村区）

ごみを資源に変える小型プラントの設置と効果測定

▽エレックス工業株式会社（神奈川県川崎市）

マイクロ波計測技術を用いた不審船検知システム構築

▽幸海ヒーローズ（神奈川県横浜市）

昆布養殖によるブルーカーボン事業

### <審査総括>

石狩市は、再エネの地産地活を推進してデータセンターの誘致を進めている。今回、実証実験に選定した 3 社は、将来的にデータを大量に使うことが想定され、データセンターのデータ需要創出の可能性がある。その他、選定されなかったスタートアップについては、継続的な各事業者へのヒアリングや独自の実証実験を行うなど「実証フィールド」として、本事業外での取り組みも行われ始めている。

## 4 実証実験

選定したスタートアップ 3 社は、令和 6 年 11 月から令和 7 年 1 月にかけて石狩市内で実証実験を行った。実証実験にあたり、石狩市と毎日みらい創造ラボを交えて協力事業者との打合せを行い下記の実証結果を得た。

## 1) 株式会社 JOYCLE

### 【解決しようとした課題】

石狩市内のゴミ処理場は、石狩市厚田区の北石狩衛生センター（平成 5 年 12 月竣工）1 か所であり、同センターから遠いエリアからは運搬に時間がかかっている。

ゴミ収集車のドライバーは、高齢化が進んでおり、冬季に雪道を運転するのは危険を伴う。また、今後は人口減少などからドライバー確保が難しくなることが想定される。

### 【課題の解決方法】

静脈コストと CO2 排出量を可視化した後、同社が群馬大と共同開発した「JOYCLE BOX」を活用することで、家庭ゴミの 5 割、事業系ゴミの 8 割以上を運ばず、燃やさず、資源化が可能になるとの提案が得られた。また、「JOYCLE BOX」の設置によりドライバー不足の解消に寄与することが可能となる。

### 【実証実験の内容】

令和 6 年 12 月 18 日にゴミ収集をしている石狩市内の事業者 3 社に説明会を行い、実証実験の協力を要請した。令和 7 年 1 月 27 日に石狩市内の事業者 3 社の協力により、ゴミ収集車のシガーソケットに GPS センサーを取り付け、2 月 4 日までの間、ゴミ収集車の走行経路などを計測するとともに、JOYCLE 社員がゴミの回収作業に同行し、廃棄物の収集・運搬のフローや収集量を把握した。現地の調査結果をもとに、JOYCLE BOX を活用した場合の ESG 貢献、コストカット効果を算出した。

### 【実証実験の結果】

実証実験の結果、ゴミ運搬の移動が多いルートと移動の少ないルートがあることが判明した。また、移動の多いルートでは、ゴミの収集効率に大きな差が生じていることが明らかとなり、JOYCLE BOX を活用することで輸送負担を大幅に軽減できる可能性を確認することができた。

JOYCLE BOX の導入コスト（12 台導入を想定）と導入による運搬コストの削減量を比較したところ、導入コストは 2～3 年程度で回収できることがわかった。さらに JOYCLE BOX の導入により、GHG（温室効果ガス）排出量や淡水使用量の削減など、ESG（環境、社会、企業統治を考慮した投資活動や経営・事業活動）に大きく寄与できることが判明した。

### 【実証実験を通じた今後の展開】

JOYCLE では、石狩市とも今後、協議を進めながら、石狩市内で JOYCLE BOX によるごみの減量やコストカット、ESG への貢献に関する実証事業を予定している。

## 2) エレックス工業株式会社

### 【解決しようとした課題】

エレックス工業は、石狩市の漁業の未来を毀損する「密漁」対策として、違法操業の解消に取り組んだ。具体的に提示した課題は以下の通りとなる。

- ① 現在の経済損失：漁業資源を奪われることでの収入減少
- ② 将来の事業機会損失：海水温上昇を見越した養殖事業実施の先送り

### 【課題の解決方法】

JAXA の次世代マイクロ波計測技術を活用し、自然界の微弱な電波と人口電波を同時に観測することで、違法操業の可能性がある不審船を探知し密漁を防止する。

### 【実証実験の内容】

実証実験は令和 6 年 11 月 18 日から 21 日にかけて、石狩市厚田の「道の駅あいろーど厚田」で行われた。石狩湾漁業協同組合の協力のもと、同組合が航行する密漁船に見立てた漁船から電波を発信しデータの検出の可否を確認した。

### 【実証実験の結果】

分析を行った結果、密漁船に見立てた船から発信した電波を検出することができた。また、日中のみならず、夜間にも問題なく電波の検出を行えることが確認できた。

実証実験では、テレビ局や新聞社など 7 媒体が取材に訪れ「実証フィールド石狩」としての認知度向上に貢献したほか、今後、密漁に対する抑止の効果にも期待が持てる結果となった。

### 【実証実験を通じた今後の展開】

今後の展開は、本事業に応募した北海道のスタートアップ「株式会社 Flyers」とドローン活用による密漁抑止の観点で連携することを検討している。さらに、検知後に海上保安庁や北海道警察、漁協などと連携したシステム構築を目指していきたいと考えている。

## 3) 幸海ヒーローズ

### 【解決しようとした課題】

人口減少による過疎化や地域産業の衰退と漁業の人手不足

#### 【課題の解決方法】

石狩市で昆布の養殖を行うことで、地球温暖化によって引き起こされる海の問題である磯焼けの解決や海洋酸性化を緩和させる。

また、地元の事業者と昆布のプロダクト(原料や加工品)を共同開発して、石狩市の新たな特産品を作り、特産品の販売を通じて環境への貢献と経済的持続の両立を実現する。

さらに、ブルーカーボンを活用したカーボンオフセット取引により、持続可能なカーボン削減に貢献するとともに漁業従事者の副収入を増やし、若い人にとって漁業を魅力ある産業にすることで漁業の人手不足解消に貢献する。

#### 【実証実験の内容】

今年度はプロジェクトの前提となる「石狩市の海で昆布の養殖が可能か」について実証実験を行うことにした。

#### 【実証実験の結果】

令和6年11月上旬に養殖を開始したところ、3か月後の令和7年2月上旬には2メートル20センチまで成長し、石狩市の海でも昆布養殖が可能なことを実証することができた。

#### 【実証実験を通じた今後の展開】

幸海ヒーローズでは、石狩市や漁協などの関係機関と連携しながら、以下のような事業展開を予定している。

- ・令和7年春に昆布の収穫を行い、商品化の検討と販売を行う
- ・ブルーカーボンの申請・認証
- ・11月にブルーカーボン申請に関わる調査スタート

## 5 成果報告会の運営業務

令和7年2月13日、毎日みらい創造ラボが主催する「第10回デモデイ」の中で「令和6年度地域イノベーション連携石狩モデル事業」の成果報告会を実施し、本事業で選定された3社が登壇した。会場は「毎日ホール」(東京都千代田区一ツ橋1-1-1)で、現地での会場

参加とオンラインのハイブリッド形式で実施され、ベンチャーキャピタルのキャピタリストや大企業の新規事業担当者、起業家、自治体のスタートアップ支援部門の担当者などが参加した。会場参加・オンライン合わせて 114 人の参加申し込みがあり、当日は関係者合わせて約 50 人が会場参加し、オンラインでは常時 40 人程度が報告会を視聴した。

報告会では石狩市から本事業の説明を行った後、実証実験を行った 3 社が各社 5 分間、実証実験についてプレゼンを行った。プレゼンを行った 3 社に対しては、インパクトスタートアップ協会事務局長の小池克典氏や、EY 新日本有限責任監査法人パートナーの藤原由佳氏といった識者との質疑応答が行われた。



※登壇して実証実験について報告する 3 社の代表ら

報告会の終了後には、「第 10 回デモデイ」に登壇したスタートアップやオーディエンスとして参加したスタートアップ、他の自治体関係者などと石狩市関係者の交流も行われた。

なお、成果報告会の様子は新聞等で報道されており、実証フィールドとして石狩市の認知向上に寄与したものと考えられる。

## 6 地域総合整備財団への報告

### 【地域イノベーション連携研究会への参加】

「令和 6 年度 地域イノベーション連携石狩モデル事業」の途中経過や最終報告を有識者へ行う「地域イノベーション連携研究会」は、第 1 回の研究会が 6 月 20 日、第 2 回は 10 月 25 日、最終報告会が 2 月 18 日に実施され、毎日みらい創造ラボメンバー 1 名が出席し、有識者に対してプレゼンテーションを行った。

1 回目は今年度の実施スケジュールや目的について説明し、2 回目はリサーチ合宿の実施報告や実証実験の実施事業者として採択したスタートアップについて、3 回目は実証実験の結

果報告を行った。併せて、地域総合整備財団への当事業の報告書の作成を行った。

## 7 課題の整理

### 【課題の解像度をどう高めるか】

「リサーチ合宿」では、「顕在的な課題」の奥に「潜在的な課題」があることが確認できた。例えば、「人手不足」は石狩市だけでなく日本全国で大きな社会課題となっているが、今回のリサーチ合宿では、農業の人手不足は常に人手不足の状態というわけではなく、季節により人手不足の深さが異なることが事業者へのヒアリングで確認できた。この場合、そもそも人手不足が課題となっているわけではなく、スタートアップの技術で代替できる可能性もあり、「農業経営のアップデート」が潜在的な課題となっていると考えられる。潜在的な課題を知るためには、現地の「人」「モノ」「カネ」を理解する必要があり、地域課題の解像度を高めるためには各事業者との深いコミュニケーション作りが重要と考えられる。

### 【地域のセンスメイキング（意味付け・納得）についての課題】

地域の各事業者とのヒアリング等を通じて、スタートアップにとっては「地域課題」と感じることが、地域の各事業者にとっては「当たり前」のことであり、地域の各事業者が課題と感じていないことが明らかとなった。

地域課題は「理想の姿」を認識することにより、現状との乖離に「課題」となって現われるものである。「地域課題」はスタートアップのサプライサイドだけの視点で語るのではなく、地域の各事業者となるデマンドサイドに認識してもらわなければ、スタートアップと各事業者との間でハレーションを生むだけである。また、「地域課題」を当たり前のものとして受け入れている状態が続けば、地域の経済格差を拡大させることに繋がりがかねない。このためデマンドサイドにも「地域課題」を認識してもらうために、「理想の姿」についても実証実験にかかわるすべてのステークホルダーが共有する必要がある。

ステークホルダー全員に「理想の状態」を知ってもらうためには、スタートアップや自治体、さらには地域の各事業者を集めた勉強会などを開催しセンスメイキングを醸成していく必要があると考えられる。

### 【参加者募集などの課題】

参加者の募集については、2回のオンライン説明会とSNS広告という方法を取ったほか、

弊社が直接スタートアップへ声がけすることで、一定数の参加者を確保することができ、石狩市（行政）とのタイアップする事業に興味を示していた。

今後は、「実証フィールド石狩」としての知名度を向上させるため、スタートアップの認知を獲得していく方法を探る必要がある。

リサーチ合宿については、多忙を極めるスタートアップにとって、2泊3日のまとまった時間を確保することが難しいものと感じられた。また、創業間もないスタートアップは実績作りをする必要があり「行政とのタイアップの実証実験」はとても魅力的に映る一方で、スタートアップが実証実験を最後まで実施という不確実性が存在する。本事業は、リサーチ合宿と実証実験を2泊3日の一連の流れで行ったが、今後は参加を呼びかけるスタートアップの事業ステージに応じて事業スケジュールを検討することも考えられる。

### 【実証実験の課題】

実証実験を行ったスタートアップについては、各々の目的や手法が明確となっており、実証実験そのものへの技術的な支援は不要で概ね期待通りの結果が得られた。一方、実証実験の進め方には一部課題があり、スタートアップが地域の各事業者へ様々なアプローチを進める中で、アプローチの順番を見誤る場面があり、わずかながらハレーションがあった。地域へのアプローチを滞りなく行うためには、予め地域の「パワーバランス」や「作法」を熟知しておく必要がある。この点については、行政支援のほか、スタートアップと地域の各事業者を繋ぐ地域コーディネーター的な役割を担う人物が必要であると考えられる。

以上



※本事業のフローチャート